ホワイトヘッドにおける組み合わせ問題

平田　一郎（Ichiro Hirata）

関西外国語大学英語国際学部

近年の汎心論において一般的な立場は、世界の微小な構成要素が全て心的要素を有し、そういった微小な構成要素から物理的対象や、通常の心的事象が構成されるという構成主義的汎心論（constitutive panpsychism)である。この考え方は、世界が物的存在からなるという物理主義を取りながら、通常の物理的対象に還元されない心的事象の存在自体は認めざるを得ない時、物的と称するものが実は心的でもあるとする時に説得的なものとなる。なぜなら微小な構成要素に心的な要素がないとは科学によっても証明されていないからである。

しかしそういった立場に立つ時、そういった微小な心的要素から、われわれ人間の通常の心的事象、経験がどのように構成されるのかという「組み合わせ問題」(combination problem)という困難な問題が生じてくる。実際微小な構成要素における心的な要素をラッセル的な「如何性（quidditas）」と考えたとしても、そこからわれわれの通常の心的要素―現象的経験的あり方を導き出すのは自明のことではないからである。

こういった現代的状況に対して、20 世紀初頭に汎心論を展開した A.N.ホワイトヘッドのコスモロジーはどのように位置づけられ、あるいはどのような現代的意義を持ちうるのであろうか。世界がそれから構成されかつ物的かつ心的であるとする現実的存在(actual entity)は、通常の解釈においては微小なものとされ、またそれ自身「経験の活動」とされる。それゆえ構成主義的ラッセル的汎心論に位置づけられるであろう。

しかし組み合わせ問題に関しては、弱い創発主義とでもいうべき立場に立つ。即ち複数の現実的存在が組み合わされて通常の人間の心的事象が生じるのではなく、ある現実的存在がより高度で複雑な構造を生成することにより、人間や高度の有機体に見られる「心」が生じるというのである。これは創発というべき立場であるが、しかしそういった「心」の生成の基には、全ての現実的存在に遍在する質の感受―クオリアがあるために、無から創発するといった強い創発主義とは言えない。遍在する心的要素が質であるという限りで、ホワイトヘッドの汎心論はむしろ汎質論（panqualitism)と見なすことができる。

しかしここでわれわれはこういった通常の構成主義的解釈によらず、むしろ微小なものからマクロな日常的なもの、さらにより大きなものすべてが現実的存在として物的でもあり、心的でもあるという非構成主義的解釈によりたい。自然をギブソン的に微小な要素と巨視的ものが重なり合わさり、共在する入れ子状（nesting)のものと見なすのである。これは何よりもホワイトヘッドのテキストを普通に読むなら出てこざるを得ない解釈であり、またそういった立場に立ってこそ、彼の現実的存在やその集まりについての理論がより豊かになるのである。

もっともこの解釈に立った場合微小な要素と共に椅子や岩といったマクロな要素も心的な側面を持つといった現代の汎心論者が決して認めない馬鹿げているかに思える状況が生じる。ただしこれについては、記憶と知覚の同等性、そして質を帯びるということを心的性質と見なすことからそれなりに納得できる説明が可能である。

そしてこういった非構成主義的解釈によった場合、標準的な構成主義的解釈による場合よりもより大きな利点がある。例えば構成主義的解釈による場合、心を担うのは微小な現実的存在であり、それは脳髄の中の生起となる。これは神経生理学を重視する現代の科学的立場には確かに合うし、またホワイトヘッドの解釈者たちもこのことを意図している。しかしそういった科学的な心についてのアプローチが心についての問題を全てつくすのではない。脳髄を超えた身体全体、あるいは身体を超えた拡張された心の可能性などは、脳髄の中の微小な生起と共に認められるべきではなかろうか。

もっともこういった非構成主義的な解釈を取っても、組み合わせ問題無しにやっていけるわけではない。それは微小な心的要素から通常の心を構成するというのではなく、微小な現実的存在と巨視的な現実的存在が入れ子状に共在するとする時、それら微小なものと巨視的なものがどのように関係するのかということになり、非構成主義的解釈は心的側面に限られない、より一般的な組み合わせ問題を導きいれたということになる。

この発表ではそういった問題について何らかの手がかりを見出すことを試みる。

参考文献

Basile, P. (2009) “Back to Whitehead? Galen Strawson and the Rediscovery of Panpsychism” in Skribna, D. ed. (2009): 179-199

Brüntrup, G. (2017) “Emergent Panpsychism” in Brüntrup, G. &. Jaskolla L. eds. (2017)：48-71.

Brüntrup, G. & .Jaskolla, L. eds. (2017) *Panpsychism: Contemporary Perspectives*, Oxford University Press.

Chalmers, D. J. (2017a) “Panpsychism and Panprotopsychism” in Brüntrup, G. &. Jaskolla L. eds. (2017)：19-47.

——(2017b) “The Combination Problem for Panpsychism” in Brüntrup, G. & . Jaskolla L. eds. (2017)：179-214. 山口尚抄訳『現代思想』(Vol. 48-8) 27-54 頁。

Coleman, S. (2012) “Mental Chemistry: Combination for Panpsychists” Dialectica 66.1, pp.137-166.

——(2014) “The Real Combination Problem: Panpsychism, Micro-Subjects, and Emergence,” *Erkenntnis*, 79.1: 19-44.

Skribna, D. ed. (2009) Mind that Abides: Panpsychism in the New Millennium, John Benjamins Publishing Company.

Wallack, F.B. (1980) *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics,* State University of New York Press.

Whitehead, A.N. (1929/1978) *Process and Reality, Corrected edition,* New York: The Free Press. 平林康之（訳）、『過程と実在』1,1981, 2,1983, みすず書房。

『現代思想　特集｜汎心論―21 世紀の心の哲学』、2020 年 4 月号（Vol. 48-8）青土社。